現場の先輩に、話を聞きに行こう

2020年度土木学会誌学生編集委員

私たち土木学会誌学生編集委員は、『立ち入り禁止！―土木構造物の裏側―』と題した企画を通して、普段立ち入ることができない土木構造物に潜入し、その構造物に携わっている先輩に話を伺い、新しい発見を学生目線で届けてきた。今回は、これまでの取材経験を踏まえ、取材を通して感じたこと、担当した学生委員が考える「学生が現場の先輩に話を伺うこと」の意味や価値を考える。

われわれが感じた「先輩に話を伺うこと」の価値

現在の土木学科で学ぶ学生を取り巻く環境は大きく変化している。コロナ禍ということもあり、現場の先輩に直接話を伺う機会を得ることは難しくなりつつあるのだ。そんな中、学会誌では、学生編集委員が、自身の専門分野にかかわらず現場に伺い、先輩方に多くの取材させていただいた（表1）。2020年5月号と同年9月号の現場取材を振り返り、学生にとっての現場見学の価値についてあらためて論じてみたい。

話を伺うことは追体験である

5月号の新潟港の記事について述べる。新潟港東港区西防波堤・第2東防波堤について取材している号である。全面立ち入り禁止としている防波堤に、釣り人が侵入、行政の度重なる対策もかいくぐられ、立ち入り禁止対策に課題があるとされていた。その中で有識者会議から「本当に危険な箇所を除いて部分的な開放を目指すことが適当である」という提案があり、部分的に開放することになった。その後、釣り文化進行モデル港として国土交通省から指定され、今現在ではアピールポイントになっているというのが概要である。この取材を通して、私たち土木学会誌学生編集委員からは以下のような意見が挙がった。

田中万琳（元学生編集委員）――技術者や管理者が根拠を持って危険だと判断し立ち入り禁止措置を講じても、釣り人に正しく伝わっていない現状がある。具体的にどこがどのように危険であるかを明示することの難しさを感じた。

宮田比奈（現学生編集委員）――当初、事故を未然に防ぎたいという自治体の考えと、釣りをしたいという市民の考えが対立してしまっているように感じた。しかし結果的には双方の意見がすり合わされ、より良い社会基盤になっていた。そういう意見のすり合わせを大切に考えていきたい。

最初から、釣り場としても、堤防としても機能するような社会基盤を考えることは極めて難しいことかと思う。しかし、私たちは現場に赴き、先輩に話を伺うことで、その可能性を知ることができた。これから私たちが現

表1　学生企画取材先一覧

3月号	名港トリトン（鋼橋）
5月号	新潟港
7月号	九州新幹線西九州ルート
8月号	渋谷駅
9月号	関西国際空港
10月号	安芸南部山系砂防ダム

場に出るようになったら、わざわざ有識者会議を開かなくても、私たち自身で市民の日常に溶け込むような社会基盤を提案できるようになりたい。そのように、先輩の話を伺うことで現場での出来事を追体験できると感じた。その時当事者だったら自分は何ができたか、できなかったか。先輩たちの経験を学生が追体験することで、学生が社会に出て社会基盤を計画するとき、設計するとき、施工するとき、維持管理するときに、自分だけでは思いつかなかった社会基盤の在り方を提案できるようになるはずだ。

このような自分の中にはなかった考えを見つけること、それが先輩に話を伺う一つの価値である。なぜこうできなかったのか？　と感じることもあるかもしれない。土木技術者よりも市民の目線に近い学生の素直な感情は、市民の方も同じように抱く可能性がある。当然、専門知識に基づく土木技術者側の意見も理解できなくてはならない。多様性を大切にする今の時代には、どちらも大切にし、「他の人はどう考えるだろうか」という視点をもてる土木技術者が求められているのではないか。

圧倒的な実務の難しさによる学びの機会

続いて、9月号の関西国際空港の記事について述べる。日々、関西国際空港では地盤の圧密による沈下が続いている。その対策であるジャッキアップなどについて詳しく伺った。開港から30年近くたった今でも圧密沈下は進行しているが、地下の約900本の柱に備え付けられている油圧ジャッキが柱を持ち上げ、不同沈下に対応する。この取材を通して、私たちからは以下のような意見が挙がった。

益田裕太（元学生編集委員）――自分は地盤分野専攻でなく、この取材を行うまで、地盤が数十年にわたって沈下していくという認識が薄かった。この取材では、不同沈下により供用後の躯体に想定しえない応力が生じることで安全面に影響が出るということを知った。土木はさまざまな分野の知見が混ざり合って機能しているということを感じることができた。

下岡優希（現学生編集委員）――関西国際空港は、取材に行けて良い経験ができた。地盤を専攻していたが、計画時点で圧密を完了させてから構造物を建設するものだと思い込んでいた。建設してから圧密沈下に対応していくという考えはなかった。自然現象を制するのではなく、付き合っていく形のように感じた。

専攻にしている分野でもそうでなくても、現場は圧倒的な知見を基になりたっているため、学びを得ることができる。「何故そこまでして対策するのか」「教科書の中ではこうならないはずではなかったか」そんな思いを抱いた時は、何かを学べる可能性が高い。自分の専門外の現場からはもちろん多くの学びがあるのだが、上記のように専門の分野でも教科書にはない学びを獲得できる。私たち学生は、さまざまな先輩に話を伺うことができる。待っているだけでは機会は巡ってこないが、自分から行動すればいくらでも行くことが可能だ。土木学会誌編集委員になってもいいし、教授のツテでどこかに行ってもいいし、単身突撃でメールを送ってみるのもいいだろう。

先輩に会いに、現場に行こう

ここまで、土木学会誌学生編集委員が感じたことを述べたが、先輩に話を伺い、現場での出来事を自分の経験とするべきということは共通していると思う。われわれのような社会に出る直前の土木学生が現場に見に行き、先輩に話を伺い、自分ごととして考えることの最大の利点は、少し先の土木業界に影響を与えることになるからだ。土木学生であるあなた自身が何を感じるかが、将来の社会に影響を与えるのだ。土木はそれほど影響力がすさまじい。コロナ禍であっても、現場の人の声を聴くことはできるので、ぜひとも先輩の話を聞きに行ってみてほしい。

（担当編集委員：浅野太我）